

# 「方をする」構文—意味と統語の記述を中心に—\*

藤巻 一真

## 要 旨

本稿は「方名詞句」を内部に含む「動詞+方をする」を「方をする」構文と呼び、その意味的、統語的特徴について、佐藤（2003）及び影山（2004）の「青い目をしている」構文と比較し、以下の観察を提出する。「方をする」構文は、属性叙述も事象叙述も可能である。また、それは必須の修飾語句を伴い、その修飾語句が述語となる抽象的な叙述（「～方が…だ」）が含まれる。一方、「青い目をしている」構文と異なり、そこには慣用句も共起可能である。また、それに関与する動詞の種類としては制限がなく、非対格動詞なども可能である。「方名詞句」を基本とするので、「方をする」構文には統語的形式である使役形や受身形も可能であり、「方名詞句」の内と外に現れ得る。

## 1. はじめに

叙述における2種類を「事象叙述」と「属性叙述」と益岡（1987）は区別し、対象の属性を表す文の重要性を明確に打ち出し、この区別はその後の属性の研究に重要な役割を果たしてきた。例えば(1a)は、「属性叙述」であり、(1b)は「事象叙述」とされる。

---

\* 本稿は、Lexicon Study Circle (LSC)（2019年10月26日、慶應義塾大学）において発表したものの一部に加筆・修正を加えたものである。参加者の長谷部郁子氏、猪又千鶴子氏、石田崇氏、磯野達也氏、伊藤たかね氏、納谷亮平氏、新山聖也氏、島村礼子氏、杉岡洋子氏からデータの判断も含め貴重なご意見・ご批判を頂いた。各氏に感謝申し上げます。また、田川憲二郎氏、上田由紀子氏からもご意見を頂いた。本稿における「方をする」構文については、長谷川信子氏と名詞化について議論をする機会を得たことが、考察するきっかけとなった。ここに記して感謝申し上げます。尚、本稿における誤り等の責任は全て筆者にある。

- (1) a. あの人は優しい。 [属性叙述]  
b. こどもがにっこり笑った。 [事象叙述]

益岡 (2008) によれば、(1a)の「属性叙述」においては、対象である「あの人」が有する属性を述べ、文構造として、対象を述べる部分(主題)と属性を表示する部分から成り立つ有題文となる。一方、(1b)は、事象叙述であり「特定の時空間に実現するイベント(出来事)」を述べ、ゆえに、「時間制(テンス・アスペクト)が深く関与する」とされる。つまり、ある時、ある場所で、「こどもがにっこり笑う」という出来事が起こったということを表す。この時、文構造は、述語を中心として項や付加詞によって文が構成され、基本的には無題文となる。(この無題文を基本として、有題文である「こどもはにっこり笑った」を派生することは可能である。)ここで、まずは、この2種類の叙述文について以下の区別を仮定して論を進めることにする。

- (2) a. 属性叙述: ある対象がある属性(特徴や性質)を有することを表現するもの  
b. 事象叙述: ある時空間に実現・存在する事象(現象)を表現するもの  
(益岡(2000:39))

この属性叙述について、影山の一連の研究(影山(2004), (2009), (2012)など)により、その意味的な特徴ばかりではなく、事象叙述とは異なる統語的な特徴も、両者の比較を通して明らかにされてきた。例えば、(3)における各文は、形式上は似たものではあるが、叙述については大きく異なるものとされる。

- (3) a. 太郎は(その時)鋭い目をした。 [事象叙述文]  
b. 太郎は(\*今日は)青い目をしている。 [属性叙述文]

c. 太郎は〔生まれつき／今日は〕優しい目をしている。

[属性叙述文] [事象叙述文]

影山 (2012:3) によれば、事象叙述文とは「出来事・動作・行為・変化・動き・一時的状態などの発生や継続、終了」を表す文のことであり、一方、属性叙述文とは、「典型的には主語ないし主題として現れる名詞(句)がもつほぼ恒常的に安定していると思われる特徴・特性・属性・性質など」を表す文である。これによると、(3a)は、「太郎が一時的に鋭い目つきをした」ということであり事象叙述文である。(3b)は、主語(主題)である「太郎」の基本的に時間とともに変化しない目の属性を述べている属性叙述文である。また、(3b)は「青い目をしている」(型)構文と呼ばれ、佐藤(2003)において、この構文を可能とする意味的な特徴が分析されている。(3c)は両義的であり、太郎の生まれつきの目の特徴を述べることもできれば、その時の(一時的にそうであった)状態を表すこともできる。このように「～をしている」構文において叙述の種類を決めているのは、後に詳しく見るがヲ格名詞によるとされる(影山(2012))。

影山(2004)は、この「青い目をしている」構文における形式と意味のミスマッチを指摘し、形式的には「～をしている」という動詞を用いた文であるが、意味的には「目が青い」という属性叙述が、ヲ格名詞句「青い目」に含まれるとする。このミスマッチを解決する方法として、軽動詞構文(light verb construction)としての「スル」の語彙概念構造(LCS)に、ヲ格名詞句(とその修飾語がなす属性叙述)の「意味編入」という操作を経て合成的に述語を作り出す分析を提案している<sup>1</sup>。

影山は、この2種類の叙述の違いは、意味的(または品詞的)な問題としてのみ捉えるものではなく、統語的な現象にも深く関わっているとし、例えば、(3)

---

<sup>1</sup> 本稿は、まず、「方をする」構文の特徴を記述するのが主たる目的であり、この意味編入という操作自身について取り上げて議論をしていないが、ここでの構文も同様に分析できると考えられる。

におけるヲ格名詞句の（定性の）違いを挙げている。(4)の各文は、疑似分裂文の焦点に現れるかどうかであるが、属性叙述のヲ格名詞は移動することができない。

- (4) a. 太郎がしたのは {鋭い／優しい} 目です。  
b. \*太郎がしているのは {青い／優しい目} です。

本稿では、この「青い目をしている」構文と類似しているが、これまであまり取り上げられてこなかった、(5)に挙げた文を取り上げる。

- (5) a. 花子は面白い考え**方**をする／した。  
b. この花は不思議な咲き**方**をしている。

これらの例では、「方名詞句」にヲ格がつき、軽動詞の「する」と共に現れている。本稿では、(5)のような文を「方をする」構文と呼び、その意味的、統語的特徴を、「青い目をしている」構文との比較を通して、明らかにするのを主たる目的とする。（「方をする」構文には、「方名詞句」が含まれているが、両者を区別して呼ぶことにする?）

第2節にて「青い目をしている」構文の意味的特徴と統語的徴について、それぞれ、佐藤（2003）と影山（2004）を中心に概観する。次に第3節にて「方をする」構文の意味的、統語的特徴を、「青い目をしている」構文と比較しながら、記述する。第4節でまとめ、今後の課題を述べる。

---

<sup>2</sup> これまで「考え方」「咲き方」など「方」名詞句自身における「～方」の意味的な特徴及びその統語的な特徴として構造及び「方」に付加する動詞の項の現れ方に焦点が当てられ、多く研究がなされてきた。井上(1990), Fukui & Nishigauchi (1991), Sugioka (1992), 影山(1993), 伊藤・杉岡(2002), 藤巻(2003, 2009), 杉岡(2005), Hoshi (2005), Kishimoto (2006), 宮川(2009), 長谷部・神谷(2010)などを参照されたい。

## 2. 「青い目をしている」構文の特徴と分析

本節では、後に「方をする」構文の特徴を考察するために、「青い目をしている」構文の特徴について詳しく分析している佐藤（2003）、影山（2004, 2009）、また、「Nをする」構文の一つとして見ている小野（2014）を取り上げ概観する。

### 2. 1 「Nをする」構文

まず、「青い目をしている」構文は、「Nをする」構文（小野（2014））の中の一部であるということを確認しておく。小野（2014）では、以下のタイプを取り上げ、生成意味論の枠組みで分析を行っている。（以下の例は、小野（2014:19-20）のそれぞれのタイプから一つ例を取り上げて掲載）

- (6) a. 出張をする：動名詞 + をする
- b. テニスをする：スポーツを表す名詞（事象名詞） + をする
- c. 怪我をする：経験を表す名詞（事象名詞） + をする
- d. 忘れ物をする：動詞 + 物（事象／個体） + をする
- e. ネクタイをする：衣類／着脱物（個体） + をする
- f. 警察官をする：社会的な役割を表す名詞（個体） + をする
- g. 青い目をしている：個体の属性を表す形容詞 + 身体名詞 + をしている

この中に、本稿で詳しく取り上げて考察する「方をする」構文は、含まれていないが、形式的には、「動詞+方をする」であるので、「動詞+物をする」である「忘れ物をする」<sup>3</sup>と同類である。一方、意味的には「太郎は面白い考え方をしている」は太郎の属性を表し、「青い目をしている」と同類となる。つまり、「方

---

<sup>3</sup> 「忘れ物をする」については、杉岡（2018a）に分析がある。そこでは、小野の問題点も指摘し、「複合名詞が事象解釈を持つ場合に左側の動詞要素が主要部として解釈され[る]」（p.60）とする分析を提出している。詳しくは、杉岡（2018a）を参照されたい。

をする」構文は、(6d)と(6g)の両者に跨るところに位置するものである。

次に、「方をする」構文の特徴を見るために、その基礎となる「青い目をしている」構文の意味的、統語的特徴を見ていく。

## 2. 2 意味的特徴：佐藤（2003）から

佐藤（2003）は、影山（1990）、角田（1991）、澤田（2001）における「青い目をしている」構文を成り立たせている条件を取り上げ、そこに関与する「所有」という概念を軸に、この構文が成立する名詞句について詳しく考察し、以下のように述べている。（波線は佐藤による。）

- (7) 「青い目をしている」型構文はとらえられた対象の根源的属性を述べるものであると考える。「根源的属性」とは、対象 X が X として成り立つ以上は常に有される X の内在的な属性であり、X の成立後に外的に付与される可能性のないものである。 (p.22)

ここで佐藤のいう「根源的属性」とは、人であれば「目、顔、体、鼻、口」などであり、「ほくろ、こぶ、しわ、あざ、傷」などは根源的属性ではない。また、「性格、性質、気質」は人の根源的属性であり（誰でも何らかのそれらを所有しているが）、「情熱、勇気、元気」などは所有していない人もいるので根源的属性ではない。人以外のモノについてもこの区別が重要であり、「色、形、大きさ」は「変容はしても喪失はされない」特徴であり根源的属性である一方で、「高さ、長さ、広さ」は人がモノをとらえるときの特徴としては必ずしも関与するものではなく、根源的属性ではないとされる。これらの区別は、以下のように「青い目をする構文」において差がでる。（以下、(8a)以外は、佐藤（2003）から）

- (8) a. \*花子は黒くて大きなほくろをしている。

- b. \*太郎は黒くて大きな鞆をしている。
- (9) a. 太郎は優しい性格をしている。  
b. \*太郎はあつい情熱をしている。
- (10) a. あの郵便ポストは変な形をしている。  
b. \*あの建物は電信柱くらいの高さをしている。

次に、この意味的な成立条件を中心として佐藤の分析を取り込む形で、統語的な特徴も含めて分析した影山（2004）の分析を取り上げる。

## 2. 3 統語的特徴：影山（2004），（2009）から

影山（2004），（2009）では、この構文の意味的な特徴のみでなく、統語的な特徴を詳しく記述している。まず、村木（1970）にあるように、「青い目」以外の「顔」などに当てはまることであるが、ヲ格名詞句には修飾語句が必要である<sup>4</sup>。（次の例は、(a)は影山の例であり、(b)は、佐藤で挙げられた名詞にて同様の点を示す例として挙げる。）

- (11) a. 彼女は\*（澄んだ）目をしている。 (影山(2004:23))  
b. 太郎は\*（優しい）性格をしている。

この修飾語が必須であるというのは、「澄んだ目」は、形式上は連体修飾の形であり、修飾語句 X（形容詞など）＋被修飾語 Y（名詞）の形を取る名詞句ではあるが、この部分の意味関係は(12)の文に対応し、「目が澄んでいる」というように「Y（名詞）」を主語とし「X（形容詞など）」が述語という関係があることに

<sup>4</sup> 村木（1970）においては、機能動詞結合を論じる際に、「する」以外にも以下のように「とる」も挙げられていて、これらは、ヲ格名詞句に何らかの修飾語句が必須であるという特徴を示すとされている。

(i) ～顔をする、～思いを／がする、～色をする、～形をする  
(ii) ～態度をとる、～姿勢をとる

関係する。

(12) a. 彼女は、目が澄んでいる。

b. 太郎は、性格が優しい。

これは影山による重要な考察であり、「形式と意味のミスマッチ」が生じていると影山は分析する<sup>5</sup>。また、ここでの主語と述語の関係は、属性叙述文のそれであり、一時的な状態を表す「今だけ」という副詞と共起しない。また、命令文にもならないとされる。(以下、影山(2009)から)

(13) a. \*君は {太い脚／青い目／ギスギスした性格} をするな。

b. \*彼女は、今だけ青い目をしている。

c. \*彼女は、その瞬間青い目をした。

そして、この構文の「する」が軽動詞構文 (light verb construction) を成していると分析されている<sup>6</sup>。

次に、この構文のヲ格名詞句には定性制限があることを指摘している。

(14) a. \*彼女は {その澄んだ目／それ} をしている。 (影山(2004:23))

b. \*太郎は {その優しい性格／それ} をしている。

<sup>5</sup> この点について、影山(2012:v)において以下のように述べている。

名詞述語文、形容詞文、動詞文の区別に関わりなく属性叙述文の意味解釈が“X is P.”というコピュラ文に相当する抽象的な意味構造に収斂する可能性を示唆する。

<sup>6</sup> 影山(2004)においては、「青い目をしている」構文は、軽動詞構文であり、「する」のLCSに「目」の特質構造の主体役割からの意味編入を仮定し、さらに、「目が青い」という叙述関係も取り込む形でLCSが出来上がる。小野(2014)では、軽動詞構文に限定せずに、「する」とその目的語による様々な解釈をPustejovsky(1995)の枠組みにおける共合成(co-composition)に基づいて分析し、「青い目をしている」構文における「する」も軽動詞であるとする必要はないと議論している。本稿では、「方をする」構文の特徴の記述を目的としているため、影山(2004)の軽動詞を仮定した意味編入の分析と小野(2014)の分析の比較は行わない。

「澄んだ目」に「その」を付けて「その澄んだ目」としたり、「澄んだ目」自身を「それ」と代名詞に変えたりすることが、この構文においては許されない。つまり、定性制限がヲ格名詞句にはあり、不定名詞句でなければならないということになる。

これに関連して、ヲ格名詞句においては統語的操作の移動ができない。(15a)は直接受身文で(15b)は疑似分裂文である<sup>7</sup>。

(15) a. \*澄んだ目が彼女にされている。

b. \*彼女がしているのは、澄んだ目だ。 (影山(2004:23))

(15)において直接受身文にできないことは、影山によると、「青い目をしている」構文の「他動性の低さ」と関係している<sup>8</sup>。

以上、ヲ格名詞句におけるこの構文を成り立たせる意味的な特徴と統語的特徴を確認した。これを踏まえて、第3節において「方をする」構文の特徴を観察し、その記述を試みる。

### 3. 「方をする」構文の意味的及び統語的特徴

本節では、「青い目をしている」構文における以上の特徴をもとに、それと同様の特徴を示す一方で、一部異なる特徴も示す「方をする」構文の特徴を見ていくことにする。

---

<sup>7</sup> ただし、かき混ぜによる移動は可能であるので、ここに追加しておく。

(i) 青い目を花子はしている。

(ii) 優しい性格を太郎はしている。

<sup>8</sup> 「青い目をしている」構文は他動性が低い文の一つとして分析され、その他の他動性の低い文とともに、出来事 (Event) 項の抑制 (suppression) を仮定している (影山 2003)。この出来事項 (Event) の抑制が事象叙述文 (一時的状態を含む) に起こると、事象叙述文には見られない統語的な特徴を示すようになるとされている。

### 3. 1 「方をする」構文に現れる動詞

まず、以下に基本となる例を挙げる。これらの例においては、いずれも主題である「花子」「この花」「このおもちゃ」「この葉っぱ」の属性を述べている。

- (16) a. 花子は、面白い／古い考え方をしている。
- b. この花は、不思議な／美しい咲き方をしている。
- c. このおもちゃは、ひどい／微妙な壊れ方をしている。
- d. この葉っぱは、面白い／不思議な落ち方をしている<sup>9</sup>。

この構文は、主題の属性として、「方」の意味が許す範囲で、動作行為の「方法」「様子」や変化における「結果状態」を表すことができる<sup>10</sup>。また、(17)のように「方」のみでは付きづらいとされる動詞（状態動詞）にも付き、その状態（有り様）などを表すことができる<sup>11</sup>。

- (17) a. この山は、厳かなそびえ方をしている。
- b. その世界は、理想的なあり方をしている。

「方名詞句」において、「方」に付く動詞は一部の動詞を除いてほぼ制限がないとされる。「方名詞句」を基本とする「方をする」構文においても、「非対格動詞」も含めて、以下のような動詞が可能である。

---

<sup>9</sup> この文には、まず、「葉っぱの落ちた状態」（結果状態）の意味がある。また、事象叙述における進行の意味もあり、葉っぱが枝から地面に落ちるのを観察しながら「この葉っぱは、ゆっくりとした／面白い落ち方をしているね」と言うことができる。

<sup>10</sup> 「方」の意味についての考察は、井上(1990)、藤巻(2003, 2009)、杉岡(2005)、長谷部・神谷(2010)などを参照。杉岡(2005)では、動詞の種類（動作／変化／使役状態変化）に応じて、対応する付加詞が「方」の解釈の範囲を決め、そのどれになるかは、文脈によるとしている（p.88）。

<sup>11</sup> 以下のように、この例においては「している」を「する」に変えることができない。

- (i) \*その山は、厳かなそびえ方をする。
- (ii) \*その世界は、理想的なあり方をする。

- (18) a. 花子は、素敵に育ち方をしている。  
b. このパンは、おかしな焼け方をしている。  
c. この葉っぱは、不思議な落ち方をしている。  
d. その岩は、面白い転がり方をしている。  
e. このトマトは、面白いなり方をしている。

この点は、軽動詞構文と異なる特徴となる。軽動詞構文の「VN をする」においては、非対格動詞の VN の場合は「する」に義務的に編入され、ヲ格が現れると不自然であるとされる (Miyagawa (1989), Tsujimura (1988))。

- (19) a. ?\*誕生をする/?\*解凍をする/?\*蒸発をする/?\*到着をする/?\*流行をする  
b. 誕生する/解凍する/蒸発する/到着する/流行する (Miyagawa (1989))

「方をする」構文における「方名詞句」は、影山 (1993:256-257) によれば、形態上は[V+N]となりVNではあるが、「勉強」などの動名詞 (Verbal Noun) とは異なり、(20)のように動詞編入を許さない。そこから、「方」自身は純然たる名詞であり、出来事や行為を表す動名詞ではないとされている。このことは、「青い目をしている」が「青い目している」と言えないのと同様である。

- (20) a. 変な歩き方をすると足を痛めるよ。  
b. \*変な歩き方すると足を痛めるよ。 (影山 (1993))

以上、「方をする」構文は、「方」が名詞であることから常にヲ格を取り、「方名詞句」の内部に現れる動詞も様々な種類の動詞が可能であることを見た。

### 3. 2 ヲ格名詞句における必須修飾語句とその叙述の種類

この「方をする」構文においても(21)にあるように、「青い目をする」構文と同様にヲ格名詞句には何らかの修飾語句が必須となる。この点は、井上(1990)、影山(1993)にて、それぞれ(21c)と(21d)の「する」の例として挙げられている。また、杉岡(2018b)では、「様態」表現が必須」とされている。

- (21) a. 花子は、\* (面白い／古い) 考え方をする／している。  
b. この花は、\* (不思議な／美しい) 咲き方をする／している。  
c. 花子は、\* (上品な) 笑い方をする／している<sup>12</sup>。  
d. 彼は、\* (変な) 歩き方をする／している。  
e. 太郎は、\* (素敵な／質素な) 生き方をしている<sup>13</sup>。

この「方をする」における必須の修飾語句は、「方」が「方法」「様子」や「結果状態」を表すといっても、(23)の軽動詞構文に現れる動名詞とは異なり、副詞的に(連用形で)表すことはできない<sup>14</sup>。

- (22) a. \*太郎は、**素敵に**、生き方をしている。  
b. \*この小屋は、**ひどく**、壊れ方をしている。  
(23) a. 太郎は、**素敵に**生活をしている。  
b. この小屋は、**ひどく**倒壊している。

---

<sup>12</sup> この例は「青い目をしている」とは異なり、「笑い方をする」の方が花子の生まれつきの属性を表していて、「笑い方をしている」の方が進行の意味に取れるのご判断を頂いた(伊藤たかね氏より)。一方で、「花子は古い考え方をする／している」については、どちらも花子の属性叙述となる。

<sup>13</sup> 「生き方をする」においては、太郎の属性としては、容認性が低い。「生きる」という動詞が、他の「歩く」「笑う」「咲く」などと異なり、具体的な行為ではなく、全体としての「あり方」のようなものだからかもしれない。仮に、「太郎はとても質素な生き方をするよね」のように言える場合、行為的な解釈の可能性はある。

<sup>14</sup> 奥津(2007)では、このような連体形と連用形で表される文が同様の意味を表す現象を取り上げて詳しく議論をしている。

このように修飾要素が必須であるとする、この「方をする」構文においても「青い目をしている」構文に対する影山（2004）の分析と同様に、ヲ格名詞句内において叙述の関係があるとするのが自然である。つまり、(24)の叙述関係が、(21)のヲ格名詞句（必須の修飾語句＋主要部名詞）内に含まれることになる。

- (24) a. 花子は、考え方が面白い。 <= 「面白い考え方をする」  
b. この花は、咲き方が不思議だ。 <= 「不思議な咲き方をする」

ヲ格名詞句の部分において、主要部名詞に対して（この場合は「考え方」に対して）述語となる修飾語句（「面白い」）が必須であり、それが属性を表す述語であるということは、次の(25b, c)のように「そうだ」で置き換えることができ、「そうしている」または、「そうする」で置き換えることができないということも一つの証拠であろう。

- (25) a. 太郎が大声で笑っているが、花子も\*そうだ／そうしている。  
b. 太郎は面白い考え方をしてるが、花子もそうだ／\*そうしている。  
c. 太郎は上品な笑い方をするが、花子もそうだ／\*そうする。

この修飾語句を必須とするヲ格名詞句自身が、(24)でみられる属性叙述文を抽象的に含むとするのであるが、属性叙述文は典型的に「Xは、Yだ」の形をとる。この「Xは、Yだ」の形式自体は、属性叙述も事象叙述も可能である（影山（2006:10-12））。以下のように、この形式で表される抽象的な叙述が、これを含む文全体の叙述と連動している。(26b)で属性叙述と事象叙述の両者が可能であったのは、(27b)における叙述がそうであるからであり、同様に、(26c)の「方をする」構文においても両者が可能なのは、そこに含まれる抽象的な叙述の(27c)が

そうであるからである<sup>15</sup>。

- (26) a. 太郎は (\*今日は) 青い目をしている。 (=3b))  
b. 太郎は {生まれつき／今日は} 優しい目をしている。 (=3c))  
c. 太郎は {生まれつき／今日は} おかしな笑い方をしている。
- (27) a. 太郎は、目が (\*今日は) 青い。 [属性]  
b. 太郎は、目が {生まれつき／今日は} 優しい。 [属性] [事象]  
c. 太郎は、笑いが {生まれつき／今日は} おかしい。 [属性] [事象]

以上、「必須の修飾語＋～方」における叙述を中心に観察してきた。次に、統語的な特徴を眺めてみる。

### 3. 3 定性制限と移動

「青い目をしている」構文において、ヲ格名詞句は定性制限が働き、「その青い目をしている」や「それをしている」と言えないのであった。これについては、「方をする」も同様である。

- (28) a. \*花子は、その面白い考え方をしている。  
b. \*この花は、その不思議な咲き方をしている。

杉岡 (2018b) で示されているように、以下の下線部全体を「そう」で受けるこ

---

<sup>15</sup> この「方をする」構文に含まれるとされる叙述について、注8で言及したように影山 (2003) の出来事項 (Event 項) の抑制の有無を仮定することが一つの可能性としてある。つまり、「青い目をしている」と同様に、属性叙述の「太郎は面白い歩き方をしている」においては、出来事項の抑制を仮定するのである。さらに重要な点として、岩本 (2011) による「内的時間」と「外的時間」の区別がある。この区別によると、「青い目をしている」の属性叙述は、内的時間についてマイナスの値をとる (内的時間がない) こととなるが、「青い顔をしていた」において内的時間はプラスになり、外的時間と連動して、その指定が可能になるであろう。「方をする」構文においても同様の分析になると考えられる。詳しくは岩本 (2011) を参照されたい。

とができるが、「それ」で受けることができない。

(29) 彼は丁寧な話し方をした。花子も {そう/\*それを} した。

(杉岡(2018b))

ただし、「そう (する)」で受けることができるのは、事象叙述のときであり、属性叙述に関しては、以下のように、「そう (する)」で受けることができない。

(30) a. \*太郎は面白い考え方をしているが、花子も {そう/それを} している。

b. \*太郎は元来面白い笑い方をするが、花子も {そう/それを} する。

前述の(25)のように属性叙述に関しては「そうだ」で受けることは可能である。

また、「面白い考え方」の一部を「それ」で置き換えることもできない。

(31) a. \*太郎は面白い考え方をしているが、花子はとんでもないそれをしている。  
る。

b. \*この花は不思議な咲き方をしているが、あの花は普通のそれをしている。  
る。

次に、ヲ格名詞句を移動できるかどうかであるが、属性叙述は (例えば、「古い考え方をしている」の場合)、「青い目をしている」と同様に不可能である<sup>16</sup>。

(32) a. \*花子がしているのは、古い考え方である。

---

<sup>16</sup> 「青い目をしている」構文と同様に、かき混ぜは可能である。

(i) 面白い考え方を、太郎はしている。  
(ii) 不思議な咲き方を、この花はしている。

- b. \*太郎がいつもしているのは、面白い笑い方である。
- (33) a. 花子<sup>17</sup>がその時したのは、おかしな笑い方である。
- b. 太郎がその時したのは、不思議な歩き方である。

### 3. 4 「方をする」構文における「させ」「られ」と慣用句

「方をする」構文は「方」名詞句を内部に含むのであるが、その「方」名詞句は、前述のとおり多くの研究がなされ、生産性が高く、統語部門で取り扱う語形成であるとされてきた。これらをもとに「方をする」構文が作られるのであるが、以下のようにいずれの統語的形式も可能である<sup>18</sup>。

- (34) a. 太郎は変な読み方<sup>18</sup>をしている。
- b. この本は大人から面白い読まれ方<sup>18</sup>をしている。 [受身+方]
- c. 太郎は子供に変な走らせ方<sup>18</sup>をしている。 [使役+方]
- d. 太郎の小説は、奇妙な書き始め方<sup>18</sup>をしている。 [統語的複合語+方]

<sup>17</sup> 研究会 (LSC) にて、事象 (行為) において移動が可能であるとの指摘を頂いた。

<sup>18</sup> ここで興味深いのは、以下の「大人から」「子供に」は、いずれもヲ格名詞句である「方」内部の「受身形 (読まれ)」と「使役形 (走らせ)」の動詞の項であり、それがこのヲ格名詞句である「～方」の外側に現れている点である。

- (i) a. \*この本は大人から面白い読み方<sup>18</sup>をしている。  
b. この本は大人から面白い読まれ方<sup>18</sup>をしている。 [受身+方] をする  
c. この本は大人から面白い読み方を<sup>18</sup>されている。 [能動+方] をされる
- (ii) a. \*太郎は子供に面白い走り方<sup>18</sup>をしている。  
b. 太郎は子供に面白い走らせ方<sup>18</sup>をしている。 [使役+方] をする  
c. 太郎は子供に面白い走り方を<sup>18</sup>させている。 [能動+方] をさせる

Grimshaw & Mester (1988) の軽動詞 (light verbs) の分析によれば、動名詞で例えば 3 項(x, y, z) 述語の「報告」においては、「報告をする」になる場合、主語(x)ともう一つの項(y)が「報告」の外に出る必要がある。「方をする」構文は、先に見たように「方」が「する」に編入しないので、動名詞ではないが、「方」が取る動詞の項が外に出ている点で、軽動詞構文の動名詞の項と似た振る舞いをしていると言える。

また、(i-b)と(i-c)、また、(ii-b)と(ii-c)は、「られ」「させ」が方名詞句の内でも外でも、それぞれ、基本的に同じ意味を表しているように思える。

「方をする」構文—意味と統語の記述を中心に—

また、(35)のように内と外の両方に受身と使役が出てくることも可能である<sup>19</sup>。

- (35) a. この本は子ども達から面白い読まれ方を（わざと）されている。  
b. 太郎は子どもにも変な走らせ方を（わざと）させている。

最後に、「方をする」構文に現れる慣用句について見ておく。まず、(36)においては、「口をきく」が「口のきき方をする」となっている。「方名詞句」において慣用句が現れること（Sugioka (1992)、影山 (1993)）から、当然可能となる。

(36) 「方をする」構文と慣用句

- a. 太郎は、ひどい口のきき方をした。 「口をきく」  
b. 次郎は、気持ちの良い手の貸し方をした。 「手を貸す」

このことは「青い目をしている」構文において、慣用句が現れにくい状況と異なる<sup>20</sup>。

(37) 「青い目をしている」構文と慣用句

- a. \*太郎は広い顔をしている。 「顔が広い」  
b. \*次郎は黒い腹をしている。 「腹が黒い」

これは、もともと「青い目をしている」構文と「方をする」構文の構成要素の違

---

<sup>19</sup> (35a)は基本的には、(34b)と同じ意味を表していると思える。(35b)も(34c)と同じ解釈があるように思える。

<sup>20</sup> もちろん、通常の関係節などでは「腹が黒い人、腹の黒い人」は慣用句の解釈が成り立つ。また、以下のように「青い目をしている」構文に慣用句が絡んだ場合、慣用句によっては差がある。

(i) 三郎はいい腕をしている。 「三郎は腕がいい」

(ii) 四郎はでかい顔をしている。 「四郎は顔がでかい」

この場合、名詞自身、つまり「腕」と「顔」が慣用句としての解釈を生み出している一方で、「顔が広い」や「腹が黒い」においては、形容詞も含めて全体で慣用句の解釈になっていると考えられる。

いに起因していると言える。上記の下線を施した部分が慣用句であるが、必須の修飾語句まで含めて慣用句を成す「青い目をしている」構文と、必須の修飾語句を除いた部分で慣用句を成す「方をする」構文の構造的な違いが原因ではないかということである。以下の(38a)において、慣用句が抽象的な叙述関係の述語（「すばらしい」）に及んでいないのに対して、(38b)においては、慣用句が抽象的な叙述関係の述語（「広い」）まで及んでいる。

(38) 抽象的な叙述における慣用句

- a. … [口のきき方がすばらしい] …
- b. … [顔が広い] …

仮に、両者に関与するとされる抽象的な叙述において慣用句が排除されるとすれば、この差を説明できるが、この仮定についてはさらなる検証が必要である。

以上、「られ」と「させ」が「方をする」構文において可能であり、また、両構文における慣用句の可否において差があることを見た。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、「方名詞句」を内部に含む「方をする」構文について、基本的な特徴として、意味的、統語的特徴を、類似する「青い目をしている」構文と比較しながら観察してきた。まとめると「方をする」構文において、属性叙述も事象叙述も可能である。また、必須の修飾語句を伴い、その修飾語句があたかも述語となる抽象的な（属性または事象）叙述（「～方が…だ」）が含まれると考えられる。「方をする」構文は「青い目をしている」構文と異なり、動詞を含むことから、動詞の形態についても観察した。「方名詞句」を基本とするので、統語的形式である使役形や受身形も可能であり、動詞の種類としても制限がなく、非対格動詞なども可能である。また、慣用句も「方をする」構文に共起可能である。今後の

課題としては、ここでの観察を理論的にどのように捉えるかという問題がある。

「青い目をしている」構文には影山（2004）による軽動詞に意味編入という操作を仮定した分析があり、さらに「Nをする」構文の一つとして「青い目をしている」構文を捉えた小野（2014）による軽動詞を仮定しない分析がある。両者の比較も含め、「方をする」構文をどう理論的に分析していくかを検討する必要がある。また、「方名詞句」に関与する動詞の項が「方をする」構文においてどう現れるかについても今後の課題とする。

## 参考文献

Grimshaw, Jane and Mester Armin (1988) Light verbs and  $\theta$ -marking. *Linguistic Inquiry* 19(2):205-232.

藤巻一真（2003）「名詞化接辞「方」における問題」*Scientific Approaches to Language* 2:1-24. 神田外語大学言語科学研究センター。

藤巻一真（2009）「ガ格及びノ格名詞句の位置と認可の方法」博士論文。神田外語大学。

Fukui, Naoki and Taisuke Nishigauchi (1992) Head-movement and Case-marking in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14:1-36.

長谷部郁子・神谷昇（2010）「「-方」表現の形成について」*Scientific Approaches to Language* 9:25-47. 神田外語大学言語科学研究センター。

Hoshi, Hiroto (2002) Theta theory and word formation in syntax, In: Jun Abe (ed). *Minimalization of Each Module in Grammar*, 51-79. Tohoku Gakuin University.

伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』東京：研究社。

井上優（1990）「接尾辞「～方」について」『日本語学』9:101-111.

岩本遠億（2011）「事象投射理論による叙述類型に関する試論—時間的限定性と属性叙述—」『言語科学研究』1-19. 神田外語大学大学院。

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房。

- 影山太郎 (2003) 「動作主属性文における他動詞の自動詞化」『市川賞 36 年の軌跡』 271-280. 東京：開拓社.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』 4(1): 22-37.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」益岡隆志 (編)『叙述類型論』 21-43. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』 136:1-34.
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎 (編)『属性叙述の世界』 3-35. 東京：くろしお出版.
- Kishimoto, Hideki (2006) Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax. *Lingua* 116:771-810.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』 39-53. 東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』 東京：くろしお出版.
- Miyagawa, Shigeru (1989) Light verbs and the ergative hypothesis. *Linguistic Inquiry* 20:659-668.
- 宮川繁 (2009) 「名詞化と項構造」由本陽子・岸本秀樹 (編)『語彙の意味と文法』 473-494. 東京：くろしお出版.
- 森山卓郎 (1986) 「接辞と構文」『日本語学』 5(3):19-27.
- 村木新次郎 (1970) 「日本語機能動詞の表現をめぐって」国立国語研究所報告 65『研究報告集Ⅱ』 17-75. 国立国語研究所.
- 奥津敬一郎 (2007) 『連体即連用?』 東京：ひつじ書房.
- 小野尚之 (2014) 「「N をする」構文における項選択と強制」岸本秀樹・由本陽子 (編)『複雑述語研究の現在』 27-40. 東京：ひつじ書房.
- Pustejovsky, James (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge MA: MIT Press.

- 佐藤琢三 (2003) 「青い目をしている」型構文の分析 『日本語文法』 3(1):19-34.
- 澤田浩子 (2001) 「属性の階層性とテイル構文—事象叙述から属性叙述へ—」 『日本言語学会 第122回大会予稿集』.
- Sugioka, Yoko. (1992) On the role of argument structure in nominalization. *Language, Culture and Communication* 10:53-80. Keio University.
- 杉岡洋子 (2005) 「名詞化接辞の機能と意味」 大石強・西原哲雄・豊島庸二 (編) 『現代形態論の潮流』 75-94. 東京：くろしお出版.
- 杉岡洋子 (2018a) 「複合名詞の事象解釈をめぐる考察」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 49:45-62.
- 杉岡洋子 (2018b) 「語の構造と意味解釈—名詞化の多義をめぐって」 慶應言語コロキウム (2018.3.18) ハンドアウト.
- Tsujimura, Natsuko. (1988) Argument structure and morphology. *The Linguistic Review* 1:81-114.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京：くろしお出版.